

[研究ノート]

国際社会とアメリカ

キリスト教の国の過去と現在¹⁾

International Society and America
—Past and Present of a Christian Nation—

堀内 一史

Kazunobu Horiuchi

はじめに：信心深いアメリカ人

1. 1620年：アメリカのはじまりと宗教
2. 1860年代のアメリカと南北戦争
3. 1893年の国際社会とアメリカ帝国主義
4. 1945年以降の国際社会の秩序：二極支配から一極支配へ
5. 2003年の国際社会とアメリカ
6. 21世紀、無極化する国際社会とアメリカ
むすびにかえて

キーワード：地球市民、格差、環境

はじめに：信心深いアメリカ人

ここ数年の授業で、アメリカについて最初にイメージするものは？と質問すると、返ってくるさまざまな答えの中に、必ずといってよいほど、「9.11 テロ事件」と「イラク戦争」が含まれている。この二つの出来事は、**地球市民**としての私たちの記憶に新しい事件でもあり、戦後の後処理問題が長引いているからでもあろう。この二つの出来事について考えていると、いくつかの疑問が湧いてくる。なぜテロはアメリカで発生したのか。なぜアメリカはイラク戦争を戦わなければならなかったのか。本稿では、こうした一連の出来事をアメリカの歴史の中に位置づけ、宗教という視点から、国の成り立ちや国際社会の中に占めるアメリカの役割について考えていきたい²⁾。そのためにはまず、アメリカとはいったいどのような国なのか。アメリカ人とはいったいどのような国民なのか、という疑問からはじめなければならない。

9.11 テロ事件が発生したあと、アメリカ人の多くは教会へ行き祈りを捧げたという。東部にある留学提携校に当時留学していた学生から、アメリカ人は極めて宗

1) 本稿は、麗澤大学経済学部国際社会コース2年次配当の「経済学基礎演習」担当者による教科書プロジェクトのために執筆したものである。

2) ただし、本稿での議論は、アメリカ史をひとつの視点から観察した場合に見えてくる風景を記述したものにすぎない。その意味で、自ずと限定されており、全体を網羅したものでは決してない。

教的で、事件発生の午後、大学のすべての授業が休講となり、皆でチャペルに集まってお祈りを捧げたという内容のメールが届いた。ヨーロッパに比較して、アメリカ人の間でいかにキリスト教が息づいているかを実感した瞬間だった。

こうしたアメリカ人の高い宗教性は統計にも表れている。アメリカ人の94%は「神もしくは普遍的な霊的存在を信じる」と答えている。80%以上のアメリカ人が神を「天におおします父」として捉えていて、「祈りによって対話できる」と信じている。ほとんどのアメリカ人は聖書を日常的に読んでいて、その半数近くは聖書が「間違いなく神の言葉である」ことを確信している。こうした宗教性を国際的に比較すると、70%のアメリカ人が「死後の世界を信じる」と答えているのに対し、イギリス人では45%、フランスでは35%、デンマークでは26%だった。別の統計では、40%のアメリカ人が「毎日祈りを捧げる」と答えているのに対し、イギリスでは18%だった。また、「日常生活に神は必要か」という質問について、重要度の低い順に1から10までポイントを与えると、アメリカ人は8.2ポイントであるが、イタリアは7ポイント、イギリスは6ポイント、フランスと日本は5ポイント、スウェーデンは4ポイントだった。

それではアメリカ人はどのような宗教を信じているのだろうか。何と82%がキリスト教徒である。その内訳は、プロテスタントが57%、カソリックが25%であった。キリスト教以外の宗教では、ユダヤ教徒が3%、イスラーム教徒が1%、モルモン教徒が1%、東方正教会が1%、その他が3%、無宗教が7%、無回答は2%となっている。この調査で、およそ8割のアメリカ人がキリスト教徒であり、しかも、およそ6割がプロテスタントであることが分かる。

アメリカ人の宗教の特徴は、聖書の言葉は神の言葉であり、間違いは一つもないと信じる人が4割近くいることである。アメリカ人の42~43%は、神が人を現在のままの姿で創造したという創造論に賛成している。21~38%は、人は神の導きを受けながら現在の姿に進化したと考え、神は人の進化に関与しないと考えるアメリカ人は14%であることが分かっている。科学者の62%が進化論に賛成し、28%が反対している。驚くべきことは、この数字は1982年以来ほぼ一定しているのである³⁾。

では、なぜアメリカ人はこれほどまでに信仰心が篤いのであろうか。その歴史を独立以前の植民地時代に遡って確認してみよう。

1. 1620年：アメリカのはじまりと宗教

巡礼父祖

一般にアメリカ史は1620年にイギリスからメイフラワー号に乗ってプリマスにやってきた巡礼父祖ビルグルム・ファザーズに始まるといわれる⁴⁾。プリマス植民地への入植者102名

3) 2007年5月のビュー研究所、同年6月のギャラップ調査より。

4) 後のバージニア植民地となるジェームスタウンにはいち早く1607年にイギリスからの入植者が到着している。

は厳寒の12月に到着した。そのうちおよそ40名は^{ピューリタン}清教徒と呼ばれる熱心なキリスト教徒であり、英国国教会の信仰とは異なる信仰をもっていたため迫害され、本国を追われて新天地アメリカに渡ったイギリス人だった。その他のイギリス人は、一獲千金を狙う者などさまざまな動機で大西洋を渡った人々だった。しかし、慣れない新天地での冬の気候は殊のほか厳しく、翌年の春までにおよそ半数が命を落としている。このような困窮の状態にあった入植者たちに食料を分け与え、窮状を救ったのはアメリカ先住民であったといわれる。今日、毎年11月に家庭で祝う^{サンクス・ギビング}感謝祭は、そうした先住民への感謝の宴に彼らを招待したことに端を発していると言い伝えられてきた。プリマス植民地は、しかし、その後人口増加することもなく、1691年にはマサチューセッツ湾岸植民地に吸収されるという運命をたどることになるが、この植民地について注目すべきことは、集団を統率する必要性からメイフラワー盟約と呼ばれる、キリスト教に基づいた、つぎのような規律を定めた点である。

われらはこの文書により、神の御前にて、神とわれらの間に厳粛なる盟約を交わし、一致団結して市民政治の実をあげ、もって秩序を改善し、自己保存を全うし、上記の目的を促進する……⁵⁾

私たちは、清教徒たちが聖書の神を信じ、神と交わした盟約を行為の原則として道徳的な秩序を保ち、植民事業を通じてキリスト教に基づく共同体を建設しようとした彼らの決意を、ここに読み取ることができる。

「丘の上の町」

このプリマス植民地を後に併合することになるマサチューセッツ湾岸植民地への初の入植者が、最初の入植地セーラムにやってきたのは、1629年のことだった。6隻の船で300人の清教徒が140頭の牛と40頭のヤギを伴い大西洋を渡った。翌30年には、清教徒のジョン・ウインスロップ総督が1000人の入植者を引き連れてボストンへと送り込まれ、本格的な入植事業が始まった。

1630年にウインスロップは、アメリカへ向かう航海の途中、有名な『キリスト教的慈善の模範』という小冊子を著した。それは、1隻の船でたどり着いた清教徒たちが、新世界に確立しようとした市民秩序の目的と政体の大要を述べたものだった。マサチューセッツ湾岸植民地は、ウインスロップ総督が思い描いた「丘の上の町」の実現を理想として掲げる、明確な宗教的ビジョンをもった人々による共同体だった。

われらのうちの10人が1000人の敵に抗することができた時、あるいは、後世の植民地は主がニューイングランドの植民地に似せてお創りになったのだ、と

5) リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダー『アメリカの市民宗教と大統領』（堀内一史、犬飼孝夫、日影尚之訳）麗澤大学出版会、2003年、62-3頁。

人々が語っているのを神がご覧になり、われらに賞賛と栄光をお与えくださった時、われらはイスラエルの神がわれらと共にあることを知るであろう。われらは「丘の上の町」⁶⁾になることを考えなければならないからである。すべての人々の注目はわれらに注がれているのである⁷⁾。

この植民地への入植者たちは、プリマス植民地の入植者よりも宗教的な自己認識は強く、神に選ばれた民という明確な意識をもっていた。聖書から着想を得たウィンスロップは、アメリカの植民地が国際社会への宗教的、道徳的、政治的模範となることを期待し、そこから人類の安寧のための模範を示し、神の栄光のための光と叡智^{えいち}を放つことになるだろうという希望を、「丘の上の町」というフレーズに託したのである。

教会と社会

マサチューセッツ湾岸植民地の最大の特徴は、公民が教会員でなくてはならなかったことである。つまり、この植民地で生活をするには、教会に属さねばならなかった。だとすれば、新しくこの植民地にやってきた入植者はどのようにして公民になったのであろうか。

マサチューセッツ湾岸植民地では、新入植者は、神と会衆の前で自分がキリスト教徒である証を示し、正真正銘の信仰をもっていること、つまり回心^{かいしん}していることを証明しなければならなかった。その方法は「準備論」と呼ばれた。これはイギリス人清教徒の神学者から強い影響を受けた、不信から信仰へといたるひとつのガイドラインであった⁸⁾。このガイドラインは植民地に持ち込まれると、社会的な特徴を帯び、だんだん到達目標へと変化を遂げる。新米の入植者は自分たちがいかに回心に到達しているかを、他の人々の前で証明しなければ植民地社会に仲間入りできなかったため、懸命になって回心しようと務めたに違いない。当時の社会はまるで一大教会のような様相を呈していた。

こうしたニューイングランドの「聖徒による支配」という神権政治体制は、ボストンを中心に行われたが、やがてタウンと呼ばれる周辺の開拓地では自治が叫ばれるようになり、旧大陸からの入植者の増加に伴い、民主政治的色彩を帯びるようになり、宗教性が薄らいでいき、やがては世俗的な社会へと変貌を遂げることになる。その一方で、社会から撤退した宗教は教会の占有物となり、回心体験を強調する、アメリカ独特の聖書を中心とした福音主義的傾向を帯びたキリスト教が誕生す

6) 聖書の「マタイによる福音書」(5章13～15項)に述べられている「山の上にある町」に着想を得た表現。「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして柵の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家のなかのものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(下線とイタリック体は筆者による)

7) ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』、63頁。

8) 準備論は、回心への過程を10段階に分けて説明している。「不信からの覚醒」からはじまって、「自己理解」を経て、「確信」に至るまで事細かに定義している。

ることになる。

アメリカの独立、憲法そして政教分離

植民地経営に終止符が打たれるのは、13植民地の代表者が参集して開催された大陸会議がアメリカ独立宣言を採択した1776年7月4日のことだった。実際の独立戦争の戦闘行為は1775年に始まり、フランス軍やスペイン軍の支援を得て大陸軍が勝利する1783年まで続けられた。独立宣言採択の際に13の植民地は13の邦(Commonwealth)に改称され、連合規約という緩やかな法規によって統合された。しかし、各邦の立法機関としての連合会議は、連合規約というものが連合会議の課税を行う権限、通商のための権限、常備軍を保有する権限などを規定しておらず、不備な点が多かったため、連合規約を廃して、新たに1787年合衆国憲法の草案が連邦会議により完成する。2年後の1789年、初代大統領、ジョージ・ワシントンによる新政権の下、第1回の合衆国議会が召集され、10の修正条項を含む権利章典を付け加える決議が採択される。1791年、合衆国憲法は州議会での批准を得て発効した。

第一修正条項には、つぎのように記されている。

議会は国教の樹立を定める法律、もしくは信教上の自由の行使を禁ずる法律を一切制定することはできない。……

これが、世界史上はじめて政教分離を規定し、信教の自由を確立した条文である。アメリカ人たちは皆自分が信じた宗教を信じる権利を必要としたが、そのためには、イギリスのように国教を樹立すべきでないと考え、第一に宗教に関する規定を設けたのである⁹⁾。アメリカの初期の歴史においていかに宗教が重んじられていたかが見て取れる。

ここで注意を喚起しておきたいのは、政教分離という表現である。日本語では「政治と宗教を分離する」という意味に解釈されているが、実はこれは間違いである。英語では、Separation of Church and Stateと表現されるように、教会と国家の分離である。つまり、ある特定の宗派や教派に対して国家が特典を与えたり、ひいきにしたりすることは許されない、という意味であって、政治から宗教を完全に切り離す、という意味では決してない。

市民宗教

1789年4月30日、ニューヨーク市で挙行された大統領就任式で、初代大統領のジョージ・ワシントンは、聖書の上に片手を置いて宣誓を行った。この慣行が現在まで連綿と歴代の大統領によって守られてきた。現職のブッシュ大統領もワシント

9) 植民地時代から、アメリカの宗教事情は一枚岩ではなく、三つの体制が存在した。北部ニューイングランドでは公に定められた公定教会として会衆派の教会が中心だった。中部のニューヨーク、ペンシルベニア、デラウェアでは公定教会はなく、宗教的に自由な雰囲気か漂っていた。南部のバージニアではイギリス国教会が公定宗教だった。

ン DC で挙行された宣誓式で、ワシントンと同じように聖書の上に手を置いて宣誓した。アメリカではこの行為は政教分離原則に反する行為とは考えられてこなかった。これは、アメリカ人が政治と宗教というものは分離できないものと考えている証拠である。また、大統領は就任式の際に行う演説で、必ず「神」という言葉を口にするのも慣例化している。そして演説の最後に大統領が付け加える、「“God Bless America” アメリカに神の恵みがありますように」という言葉は、初代大統領が使用して以来、歴代大統領が必ず言い添えてきた一文である。

アメリカ政治のもっとも代表的な儀式である大統領就任式での、こうした宗教に関わる一連の言動は、アメリカ人にとっては何ら不思議なことではない。前節で述べたように、憲法修正第一条で禁止しているのは、国教を樹立する行為、つまり国家がある特定の教派に特典を与えるような行為であって、抽象的な「神」という表現の使用を禁止しているわけではないからだ。

大統領就任式や大統領が行う公の場での演説のような、政治の領域と宗教の領域が交差する局面に見られる宗教性を、社会学や宗教学では市民宗教と呼ぶが、ここで簡単に定義しておこう。

社会学者のロバート・N・ベラーは 1967 年に、「アメリカの市民宗教」という論文を発表した。ベラーは、リンカン大統領やケネディ大統領などの歴代大統領の就任演説などを分析して、人々の魂を救済するキリスト教やユダヤ教などの救済宗教の伝統と並んで、それらの影響を受けながらも、明確にそれらと区別できる宗教的次元が存在することを指摘した。そうした宗教的次元を指す名称として、啓蒙思想家ジャン・ジャック・ルソーの造語である「市民宗教」を選び、本格的研究の必要性を説いた。

ベラーによれば、アメリカの市民宗教は、アメリカ人に国民としてのアイデンティティを、アメリカ社会には国家としての正当性を与えてきた。またそれは、アメリカ人の歴史的経験から得た知見を基に形成された「宗教的自己理解」であり、「一組の信条、象徴および儀礼」から構成されている。市民宗教には「神の超越性」と「国家の自己超越」という二つの相反する類型がある。

それでは、つぎに「宗教的自己理解」、「信条」、「象徴」、「儀礼」、「神の超越性」、「国家の自己超越」についてそれぞれ順を追って見ていくことにしよう。

宗教的自己理解

まずここで、独立戦争の頃のアメリカに話しを戻そう。植民地の牧師たちは独立戦争が始まると、自分たちが行おうとしている革命的事件を、旧約聖書の「出エジプト記」の記述に照らして、歴史的・宗教的にそれが持つ意味を理解し、正当化しようとしていた。「出エジプト記」はいわば自らの姿を映し出す鏡の役割を果たした。宗教的な文脈に独立戦争を位置づける行為である。こうして、当時の植民地人は自分たちの過去、現在、そして未来に意味を与えたのだった。

「旧約」の世界に登場する古代イスラエル人は、エジプトに捕囚として囚われていたが、あるときモーセは神の啓示を受け、神から「約束の地カナン」を授かるこ

とになる。モーセは神の言葉通りに、捕囚となった人々を引き連れてエジプトを脱出していく。紅海の岸辺に差し掛かったとき、杖をかざすと紅海の中に道ができ、そこを進んで向こう岸へとたどり着く。その後、後を追ってきたエジプトの軍隊は水に呑みこまれ、見事脱出は成功する。こういうストーリーを、当時の牧師たちは、こう説いた。(後の初代大統領となる) ワシントン総司令官はモーセである。ワシントンは、古代イスラエル人に当たるわれわれ植民地人を引き連れて、エジプトに当たるヨーロッパから、紅海に当たる大西洋を渡って、約束の地である新世界アメリカにやってきた。独立という出来事によって神の啓示は実現するであろう、と。独立期の人々にとって、こうした宗教的な自己理解のための、いわば鏡の役割を担うものが、市民宗教であった。

一組の信条、象徴および儀式

それ以来、ユダヤ・キリスト教文明の影響を強く受けたアメリカの市民宗教には神への信仰が存在すると考えられてきた。しかしその神は、「救済や愛よりも秩序や正義にかかわりを持ち、社会に秩序を与える」存在である。つまり、市民宗教の神は、個人の魂の救済を担うキリスト教などの救済宗教とは区別された、公の宗教であり、公共性に関わる宗教の神なのである。前述のように、大統領は就任演説や一般教書など公式の場での演説で「神」という言葉を使用するが、決して「キリスト」の名を口にすることはない。その意味で、サミュエル・ハンティントンが市民宗教は「キリスト抜きキリスト教」と述べているのは的を射た表現といえる。

つぎに、象徴について説明しよう。アメリカの首都ワシントン DC を訪れると、モールと呼ばれる芝生を敷き詰めた長方形の広場がある。そのモールを形作る四辺の、それぞれの辺の中間点には、大統領公邸ホワイトハウスをはじめとする、市民宗教の象徴的な建造物が、十字架の形で配置されている。長方形の中心部には初代大統領のワシントン記念塔がそびえている。記念塔を中心に、西側にはリンカン記念堂が配置されている。記念堂の中ほどにリンカンの坐像が鎮座している。リンカンの坐像の背後には二枚の壁がちょうど両端に配した屏風のように並んでいて、その一方には「人民の、人民による、人民のための民主主義」で有名なゲティスバーグの演説が刻まれている。もう一方の壁には、第二期就任演説の文言が刻まれている¹⁰⁾。そこからちょうど東にはワシントン記念塔越しに、議会議事堂がある。ここで4年に一度の大統領就任式が行われている。ワシントン記念塔の北には、ホワイトハウスがある。そして、ホワイトハウスから南側のポトマック川沿いには独立宣言起草者で第三代大統領のトマス・ジェファソンの立像のあるジェファソン記念堂が配置されている。立像の周囲を4つの壁が囲んでいるがそれぞれには、独立宣言の文言が刻まれている。

儀式としては、4年に一度行われる大統領就任式が市民宗教の儀式の典型である。議会議事堂のバルコニーで式典は行われるが、ぎっしりと埋め尽くした観衆が

10) 1960年代の公民権運動当時、ワシントン大行進というデモのあとに行われた、キング牧師の「私には夢がある」という名演説の舞台となったのが、まさにリンカン記念堂であった。

見守る中、牧師が観衆とともに祈りを捧げる場面から始まる大統領就任式は、教会で行われる礼拝そのものである¹¹⁾。そのほか独立記念日の演説あるいはメッセージ、ホワイトハウス裏に設けられるクリスマスツリーの点灯式や、感謝祭での演説などの式典が市民宗教の儀礼と考えられる。

「神の超越性」と「国家の自己超越」

神の超越性というのは、神は国家を超越し、ある倫理的な判断を下すのに対して、国家の自己超越は、国家が神と同レベルに位置づけられ、国家自体が超越した存在となり、国家自身が倫理的判断の主体となる。この二つの国家のあり方は、大統領の解釈による。つまり、市民宗教は大統領の解釈次第で、二つの類型に分けることができる。ひとつは、神の超越性を信奉する、「預言者型市民宗教」であり、もうひとつは、国家自体を崇拜する「司祭型市民宗教」である¹²⁾。預言者型では、あたかも預言者が神の啓示を受け、神の審判を礼拝に集まった会衆（信徒）に伝えるかのように、国家がその理念、つまりアメリカの場合は独立宣言や憲法で謳われている規範に反する行為を行った場合、大統領が神の裁きを国民に伝える機能を果たす。つまり、国家は一定の宗教的・倫理的基準の下にあり、その基準により裁かれるというもので、預言者型は「安全装置」として機能する。一方、司祭型では、あたかも司祭が会衆を誉めそやし、神の恵みを受けている教会を称えるかのように、大統領は神が国家や国民の後ろ盾をしてくれていることを国民に伝え、そうした偉大な国家を誉めそやす。

ベラーによると、歴史的に見た場合、市民宗教は必ずしも「価値ある目的のために信奉されてはこなかった。」国内では、神、国家、国旗を融合した国粹的な思想が、自由主義的な思想や集団を弾圧してきたし、南北戦争までは奴隷制度を支持する集団は、(創造主は人間をすべて平等に創造したという書き出しで始まる)独立宣言の精神を否定する運動を行っていたし、アフリカ系アメリカ人や先住アメリカ人に対する非人道的な処遇を正当化するために利用されてきた。国際社会に対しては、19世紀から20世紀にかけての帝国主義的な膨張政策を正当化する「明白な運命 (manifest destiny)」という観念と結び付けられてきた、という¹³⁾。「司祭型市民宗教」を信奉する大統領の政治によって生じる「国家の自己超越」は、国際社会にとって極めて危険な存在だといえよう。

11) 厳かな気分を誘うお祈りのあと、聖歌隊や合唱団が愛国心を高揚させる歌、愛国歌『アメリカ』(My Country 'tis of Thee)「わが祖国、甘き自由の地よ、汝をわれは歌わん。わが祖父の死せる地よ、巡礼父祖はわが誇り、山山から自由の響きを鳴らせ。」やアメリカ・ザ・ビューティフルなどを熱唱する。否が応でも愛国心が高まった会場。そのあとに、聖書の上に手を置いて副大統領そして大統領の宣誓式が行われ、就任演説で幕を閉じる。

12) 宗教史家のマーティン・マーティは、ベラーの神の超越性と国家の自己超越に対応して、それらを解釈する大統領の側から、これら二つの類型を提示した。ピラードとリンダーは、これら二つのほかに、国民を慰め理解を示す牧師型市民宗教を加えている。これによると、ビル・クリントン大統領(第42代)はこの牧師型市民宗教の類型に属するという。

13) Bellah, Robert N. 1968. "Civil Religion in America," *Daedalus*, pp. 1-21.

「模範としての使命」と「介入としての使命」

ロバート・コールは、対外政策との関連で市民宗教のあり方を、「模範としての使命」と「介入としての使命」とに類型化した。前者は、「神の超越性」と「預言者型市民宗教」に、後者は「国家の自己超越」と「司祭型市民宗教」に対応している。模範としての使命は、第1節で引用した、マサチューセッツ湾岸植民地総督のジョン・ウィンスロップの『キリスト教的慈善の模範』に描かれている「丘の上の町」で表現される心の構えである。当時のピューリタンたちは新天地アメリカに、聖書に描かれている「丘の上にある町」を建設しようという使命観に燃えていた。それは、極めて消極的ではあるが、自由とキリスト教の価値を自らの実践で実現しようとする「模範としての使命」であった。彼らは、国際社会がそれに従うだろうと期待した。この「模範としての使命」と対象的な心の構えが、力づくでも自由と宗教的価値を国際社会に広めていくという「介入としての使命」である。

ここからは、前述した「神の超越性」「預言者型市民宗教」「模範としての使命」と、「国家の自己超越」「司祭型市民宗教」「介入としての使命」を対比しながら、大統領の市民宗教と国内政策・対外政策との関係を見ていくことにしよう。

2. 1860年代のアメリカと南北戦争

南北戦争

19世紀初頭のアメリカは、産業の発展を手がかりに国づくりに励もうとする北部諸州と、奴隷制度に支えられた農業生産物の自由貿易によって国を発展させようとする南部諸州との間に軋轢が生じていた。自国産業の健全育成を図るために保護貿易主義を採っていた北部としては、農産物をヨーロッパ市場に流通させるべく自由貿易主義を採っていた南部とイギリスが貿易を契機に接近する気配をいち早く感じ、危機感を募らせていた。そういう経済状況の背景に奴隷制度が位置づけられていた。南北戦争はこうした状況下で発生したのである。

戦前、大統領就任前にリンカンは「内輪で分かれ争う家は立ち行かない」という聖書の一説を引用して、半分が奴隷で半分が自由民という国はいずれ滅びるとして、奴隷制度を痛烈に批判していたことは注目に値する。1860年11月6日の大統領選挙で、確かに奴隷制度に反対ではあったが、リンカンは即時廃止を説かず、制度の拡大を抑止すべきと説いたため、大統領選挙に勝利した。1861年3月4日に就任式が行われたが、リンカンが当選してから就任式までの間に合衆国は分裂してしまう。前年の12月にサウスカロライナ州が連邦を離脱し、同年1月にはミシシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナといった南部の5つの州が連邦を離脱した。南部諸州は南部諸州連合という国家を樹立した。4月12日には戦闘行為が開始され、その後バージニア、アーカンソー、ノースカロライナ、テネシーといった4つの州が連邦を離脱し南部諸州連合に加わった。こうして勃発した南北戦争は、1865年4月までの4年間続くことになる。

預言者型市民宗教とリンカン大統領

預言者型市民宗教の典型例は、第16代大統領のエイブラハム・リンカンとされる。リンカン大統領は、60万人を超える戦死者を出した南北戦争から宗教的な意味を読み取ろうとしていた¹⁴⁾。それは、ゲティスバーグの演説（1863年9月19日）に明確に表現されているので確認しておこう。

われわれの前に残されている大事業に、ここで献身しなければならないのは、むしろ生きているわれわれであります……すなわちそれは……神の下にあるこの国家に、自由の新生を勝ち取らせること。そして、人民の、人民による、人民のための政治を、地上から絶滅させないこと、であります。

この引用に見られるように、リンカン大統領にとってアメリカ合衆国は「神の下にあるこの国家」として認識されていることが見て取れる。

ところで、リンカン大統領は南北戦争というものをどのように解釈していたのだろうか。そのことを理解するヒントは、1865年3月4日に行われた二期目の就任演説にある。以下がその引用である。

双方とも同じ聖書を読み、同じ神に祈りながら、各々が敵に勝つために神のご加護を求めています……双方とも祈りが聞き届けられることはあり得ませんでした。全能の神には御自らの目的がおありになるのです。

われわれが切に望み、一心に祈るのは、この戦争という大きな天のむちが速やかに過ぎ去ることです。しかし、もし神の思し召しが、250年におよぶ、奴隷の報いられない苦役によって蓄えられたすべての富が消滅するまで、またむちによって流された血の一滴一滴が、剣による血の一滴一滴によって償われるまで、この戦争が続くことであるならば、3000年前に言われたように、今もなお、「主の裁きはまことで、ことごとく正しい」と言わなければなりません。

この引用で、「双方」というのは北軍（アメリカ合衆国）と南軍（アメリカ南部諸州連合）のことで、両軍の思惑や期待とは裏腹に神には神自身の計画がある、とするリンカンの認識が前提となっている。つまり、神はどちらの見方でもないという点が重要である。というのも、通常戦勝国ならば、「神が味方したから勝利した」と自分に都合のよい解釈をしがちであるにもかかわらず、リンカンの発言には、戦勝国にありがちな勝者の驕りが微塵もなく、それどころか、国家を超越した神を畏れ、敬う謙虚さすら伺われるからだ。つぎに注目すべきは、第二段落にある「この戦争という大きな天のむち」という箇所である。リンカンにとって南北戦争は、「神は人間を平等に創りたもうた」という文言から始まる『独立宣言』の精神に反

14) 戦死者数を比べると、独立戦争4044人、米西戦争5400人、メキシコ戦争1万3270人、朝鮮戦争3万3000人、ベトナム戦争5万8000人、第一次世界大戦11万5000人、第二次世界大戦31万8000人と、南北戦争が圧倒的に多いことが分かる。しかも外国との戦争ではなく、文字通り同国人同士の戦争だった。（猿谷要『検証アメリカ500年の物語』平凡社、2004）

して奴隷制度を保持してきた南軍と、奴隷制度を今まで黙認してきた北軍の双方が国是に反した行為を行ってきたことに対する、神からの裁き、つまり、天罰だ、という解釈である。

リンカン大統領の死の宗教的意味

1865年4月14日、リンカン大統領はファースト・レディーのメアリー夫人とともに、ワシントンDCにあるフォード劇場で観劇の最中、俳優のジョン・ブースによって至近距離から銃撃され、翌15日未明、息を引き取った。リンカン大統領の死はワシントン大統領と同じように、宗教的な解釈の対象となった。ワシントンは旧約聖書の出エジプト記に描かれているモーセ的存在であったが、全米各地の牧師たちはリンカンを、合衆国の分裂を防ぎ国家の再生を果たしたキリスト的存在として描いた。キリストは十字架上で亡くなり全人類の罪を贖ったが、リンカンは銃弾に倒れ合衆国の罪を贖ったとされる。4月14日は、偶然とはいえ、キリスト教の復活祭の前の金曜日、つまりキリストの受難（裁判と処刑）日であったことから、人々はキリストとリンカンを重ね合わせてその死を偲んだといわれる¹⁵⁾。

ここまで、市民宗教の神の超越という類型の典型としてリンカン大統領について見てきたが、つぎに国家自体が自己超越した司祭型市民宗教の典型例を、第25代大統領ウィリアム・マッキンリーの政権が行った米西戦争とのかかわりで見えていくことにしよう。しかし、その前に当時のアメリカの国内と国際社会の情勢を確認しておく必要がある。

3. 1893年の国際社会とアメリカ帝国主義

アフリカ系アメリカ人 — 奴隷から被差別民族へ

奴隷解放宣言は、1862年9月22日と63年1月1日と、二度に分けて発布された。南北戦争の後、北部人が支配して南部に駐在していた時代を「南部再建時代」と呼ぶが、1877年までに最後の連邦軍が北部へ引き上げ、再建時代は終わる。それから、黒人たちの「失望の時代」が始まる。南部の「ホーム・ルール」つまり自治が始まった。この頃から南部で黒人への差別を合法化する動きが加速する。1883年の最高裁判決により、黒人への市民権を認めた憲法修正14条よりも、各州の権限を尊重するというもので、人種隔離政策への第一歩となった。例えば、「ホテルやレストランの経営者は他の客に不快な気持ちを与えるような者を客として取り扱わなくても良い」という法律がある。

フロンティアと先住民の運命

南北戦争が終焉を迎えると、西部、つまりフロンティアへの意識が再燃し、西部開拓が加速されていく。そうした大きなうねりの中、先住民への差別や敵対心が目立つようになる。1869年に、最初の大陸横断鉄道が開通した。もともと高原に住

15) ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』、137-141頁。

んでいた先住民たちはバッファローと共生していた。必要以上にバッファローは殺さず、肉は乾燥して保存食、毛皮は衣服やテントとして活用してきた。ケンや骨まで生活用品として丁寧に利用した。だが、白人たちはバッファローを乱獲し、鉄道をフルに活用して皮を大量に東部へ輸送した。先住民は生活資源を奪われ、食糧源を失って白人の開拓村を襲うことになる。こうして、白人と先住民との対立が始まり、白人が勝利することになる。1890年の国勢調査でフロンティアは消滅したことが分かった。1924年にはすべての先住民にアメリカの市民権が与えられている。

新移民の波

植民地時代にやってきた入植者に代わり、独立後はヨーロッパからの移民が増加していく。初期のころの移民はイギリス、ドイツ、アイルランドなど北欧・西欧諸国からの移民だった¹⁶⁾。例えば、46年にじゃがいもの大飢饉が発生したアイルランドからは多くの移民が押し寄せた。19世紀後半には南欧や東欧あるいはユダヤ人などの流入が激しくなった。ポーランド人、ギリシャ人、イタリア人、スラヴ系人種、ユダヤ人が押し寄せた。宗教も、プロテスタントからカソリックやギリシャ正教、ユダヤ教など多様化した。1891年から1900年までの10年間で、旧移民は160万人だったが、192万人が新移民として入国し、新移民のほうが多くなった。1900年の総人口約7600万人に対し、10年間で815万人が入国したことになる。

戦後の経済発展

南北戦争後は、北部の産業は大きく発展し、急速な工業化と都市化が進むことになる。南北戦争の北軍の総司令官グラントは、1869年から77年まで2期大統領としてアメリカを牽引したが、彼の8年間は「金びか時代」と呼ばれる経済発展期であった。これは、マーク・トウェインが、1873年にウォーナーと共同で発表した『金びか時代』にちなむとされる¹⁷⁾。こうして、高い関税率に守られ、産業は発展し、自由競争が生まれその結果、各業種に独占企業が誕生した。まさに、ピカピカ光っていても、一皮むけばメッキであることがばれるといった時代だった。鉄鋼王のアンドリュー・カーネギー、石油王のジョン・ロックフェラー、発明王のトマス・エディソン等がこの時代を作ったといっても過言ではない。73年にはサンフランシスコのケーブルカーが開通。74年にはニューヨーク市に市街電車が登場。76年にはアレクサンダー・ベルが電話を発明。86年には独立100年を記念してフランスから贈られた自由の女神が完成し、88年にはジョージ・イーストンがコダック・カメラを完成した。こうして、1894年にアメリカの工業生産額は、イギリス、ドイツ、フランスの生産額合計を上回り、アメリカは、押しも押されぬ世界第一位の工業国へと成長を遂げた。

1890年にはフロンティアは消滅し、このころ独占企業家たちの目は、国内市場

16) 移民の原因はさまざまあるが、宗教的・政治的迫害、戦争、産業革命による失業、大飢饉などの異常気象が主な原因とされている。

17) この作品は、当時の金儲け主義、政界の汚職、低下した倫理観などをみごとに描いている。

から海外市場へと向ける時代を迎えていた。陸のフロンティアから海のフロンティアを求めて、海外進出論がアメリカ社会に広がり、1898年の米西戦争をきっかけに、アメリカの海外進出は本格化する。

海運力、海軍力、植民地

米西戦争について論じる前に、歴史の流れを方向付ける一冊の本が出版されているので紹介しておこう。1890年に出版されたアルフレッド・マハンの『海上勢力の歴史に及ぼす影響』である。この本は、陸のフロンティアが消滅し、膨張の方向性を失ったアメリカが形成していく、時代のうねりのゆくえを決定づける役割を果たすことになる。実は、1660年から1783年までに行われた欧米諸国間の海戦を綿密に研究したマハンが、その著書の中で行った提言は、アメリカばかりか日本を含む国々にも多大の影響を与えた。彼は海軍兵学校を卒業し将校の経験をつんだ後、86年にはニューポートに新設された海軍大学の校長に就任する。この本は大学での講義内容をまとめたものである。

マハンの言う海上勢力とは単に海軍力だけではなく、通商や海運を指している。マハンが著書の中でつぎのように説いた。これからの世界では、市場の獲得競争が激化するため、特に海に面した国家合衆国は、その工業製品や農産物を海外に輸出する、①海運力、すなわち商船隊と、それを護衛する、②海軍力が必要となる。しかも、こうした輸出を促進し拡大し、輸送産品を保護する拠点ともなる、③植民地という、3つの要素が不可欠である、と¹⁸⁾。このように、19世紀のアメリカは、マハンの思想の影響下に、帝国主義的な膨張政策を採るようになって、徐々に地球市民を守る「世界の警察官」という独善的な自覚を強めていく。

米西戦争

スペインやポルトガルの植民地だった中南米諸国は、1820年前後に独立を果たしていたが、キューバははまだ植民地としてスペインの統治下にあった。1895年から続いていたキューバのスペインに対する反乱は激化の一途をたどっていった。当時のアメリカ人は独立前のアメリカがそうであったように、ヨーロッパの支配から自由になるために活動を続けるキューバの反乱に同情的だった。マッキンリー大統領は平和的解決を要望し、スペインも受け入れる方向で推移していた。その矢先の出来事である。

1898年2月15日 スペイン領キューバのハバナ湾内に停泊中の戦艦 USS メイン号が、爆破事故を起こした。当時、日本人のシェフやボーイが8名乗船していたが、260名が死亡。50年後燃料の石炭の自然発火が原因と判明したが、当時はスペインによる機雷による爆破と断定された。これを機に、「メイン号を忘れるな。Remember Maine!」がスローガンとなる。4月25日、議会はスペインに対し宣戦布告し、5月1日にはスペイン領フィリピン・マニラ湾の戦いが勃発する。7月3

18) A. T. Mahan. 1987. *The Influence of Sea Power upon History: 1660-1783*, Dover Edition, New York: Dover Publications, pp. 28-89.

日、スペイン艦隊はキューバのサンチャゴ湾外でアメリカ艦隊に撃沈される。7月25日、アメリカ軍はスペイン領プエルトリコに上陸を敢行した。その結果、12月10日にパリ講和条約が締結され、アメリカはフィリピン、グアム、プエルトリコを併合し、キューバを保護国とする。ハワイ諸島はハワイ共和国となり、後にアメリカに併合される。その他の太平洋上の島々も次々にアメリカの領土となっていた。

フィリピン併合と国家の自己超越

マッキンリー大統領は、10代でキリスト教への回心体験をもつ、ボーンアゲインの福音派として知られている。大統領は、最小限度の労力で勝利したこの戦争の後処理としてフィリピンについて思い悩んだ。彼が考えた選択肢は、スペインに返還するか、フランスとドイツに委譲するか、それともフィリピン人による統治を許すか、といったものだった。大統領はフィリピン人には統治能力がなく、万が一自治を許せばスペインによる統治よりもなお悪い無政府状態となることを懸念して、「われわれ [アメリカ] が全島を統治し、フィリピン人を教育し、向上させ、文明化し、キリスト教化し、神の栄光によって、彼らに対して出来る最善の努力をするしかない」¹⁹⁾ と考えた。

マッキンリー大統領は司祭型市民宗教の典型的な解釈をしているが、それは1898年12月15日に行われた、フィリピン領有をめぐる演説に見ることができる。

(フィリピンの領有は) 占領を目指した聖戦の結果ではなく、良心からの呼び掛けに対し、節度をもって忠実に、恐れを顧みずに応えたことへの褒美なのであり……利益や復讐のためではなく、人権が抑圧された人々の解放のために戦ったのです。…… (そして、アメリカの力は) 人類のためにのみ使われ、常に正義と慈愛とを調和し……われわれの進路は進むべく義務づけられたものであり、われわれの大義は正しいのです。……

われわれは自分たちに課された、より高次の道徳的義務に従っていました。神はわれわれが義務を見極めるための光をわれわれに与えたもうた。だから、われわれは自らの良心に従い、文明世界の承認を得て、彼らフィリピン人のために義務を果たしていたのであります²⁰⁾。

まず大統領は、フィリピンの領有が「占領」を目的とするものではないことを明確にすることから始める。またこの戦争は、「利益」や「復讐」を目的とするものでもないことを、確認したうえで、目的は、あくまでも、自由を奪われ人権を蹂躪されスペインの圧政に苦しんできたフィリピンの人々を「解放」することだとしている。では、この解放という行為はどこからきたのだろうか。二番目の段落に注目すると、「より高次の道徳的義務」に従ったと述べられている。これはその後につ

19) ピラードとリンダー『アメリカの市民宗教と大統領』164頁。

20) 前掲書、164-5頁。

づく、神から与えられた義務ということになる。したがって、フィリピンの人々を解放したのは、神から与えられた義務を果たしたまで、ということだ。第一段落に戻るが、アメリカの力、つまり軍事力は、常に「人類のために使われ」るものであり、フィリピン領有についても神からの義務に従ったものであり、したがってアメリカの大義は正しい、ということになる。

こうした発言の背景に、アメリカ大陸を東から西へと覆い尽くしたフロンティアが西海岸を超えて太平洋へと広がり、ハワイやフィリピンを呑み込んでいくアメリカの帝国主義的な膨張政策、産業大国としてのアメリカの国力・海運力・海軍力、「明白なる運命」などが背後に働いていたと考えることも可能であろう。一言でいえば、アメリカは神の代理としてフィリピンの人々を解放するためにこの戦争を戦ったということである。こうした国家の認識の中には、神の超越性の片鱗も見ることができない。むしろ、国家自体に超越性が付与されているというべきであろう。

このように司祭型市民宗教がアメリカの帝国主義的膨張政策とむすびつき、国家自体が超越した、いってみれば国家の自己崇拝的な様相を呈することを見てきた。実はこれと極めて類似した事態が、21世紀にイラク戦争という形で再燃した。この戦争は9.11テロ事件との関連で、同規模のテロを未然に防ぐ予防戦争という形で、7割を超えるアメリカ人の賛成を得て戦われた。現代アメリカを検討する前に、20世紀の国際社会の情勢を決定づけた、第二次世界大戦以降の状況から見ていくことにしよう。

4. 1945年以降の国際社会の秩序：二極支配から一極支配へ

東西冷戦による二極支配

1945年2月のヤルタ会談と7月のポツダム会談は東西二陣営が鋭く対立する冷戦構造の起点となった。やがてこの二極対立は、1946年、トルーマン大統領（第33代）の出身地ミズーリ州ウェストミンスター大学で行われたチャーチルの「鉄のカーテン」演説に象徴されるように、次第に深刻なものとなっていった。

1947年2月、イギリスはそれまで自国の勢力下にあったギリシャ、トルコから撤退することをアメリカに通告した。この地域にソ連の影響力が強まることを恐れたトルーマン大統領は、自由主義を守るためにギリシャ、トルコに対して経済的・軍事的援助をすることを議会に要請した。これがトルーマン・ドクトリンと呼ばれるもので、共産主義に対する「封じ込め政策」の最初のものとなった。この3ヵ月後、アメリカはマーシャル・プランを発表し、戦争で疲弊した欧州経済を復興させるために、ヨーロッパ諸国への経済援助を決定した。しかし、東欧諸国の参加はソ連の圧力によって実現せず、ヨーロッパはこれを契機に完全に東西に分断されることとなった。そして1949年にはNATOが結成され、東西対立はますます激しさを増していった。一方、東側陣営もコミンフォルム（欧州共産党情報局）を結成し（1947年）、イタリアやフランスなども含めた各国共産党の組織的な系列化をはかった。そして、マーシャル・プランに対抗してコメコン（経済相互援助会議）

を設立し、さらに 1955 年にはワルシャワ条約機構を結成した。

東西ドイツの分裂

1945 年のヤルタ会談で、ドイツの分割統治が決定した。また、ソ連占領地区のなかにあるベルリンもまた、東側をソ連が、西側を仏・英・米がそれぞれ占領することとなった。敗戦国ドイツの通貨を大量に発行して戦後補償を可能にしようとしたソ連の暴挙を防ぐために、アメリカとイギリスは新しい紙幣「ドイツマルク」を発行して通貨改革を行った。これに反発したソ連は、1948 年、西部ベルリンを封鎖した。これが世に言うベルリン封鎖である。つまり、西ベルリンから西ドイツ地区につながる鉄道と高速道路を封鎖したのである。こうして 200 万人を超える西ベルリンの市民は孤立することとなる。交通は遮断され、送電も止められ、陸の孤島と化した。西側諸国に不安を与えまいと、西ベルリンを西側につなぎとめておこうと考えたトルーマン大統領は、大規模な空輸作戦を決断。その後およそ 1 年間にわたって、輸送機で、食料や燃料などが空輸された。結局、封鎖は解除されたが、1949 年、ドイツは東と西に分断され、資本主義国と社会主義国という二つの体制の下でスタートした。1961 年には、ベルリンの壁の建設が東ドイツによって始まった。

二つの代理戦争

このように第二次世界大戦後の国際社会の秩序は、自由主義に基づく西側陣営の牽引役を担うアメリカと共産主義に基づく東側陣営の大国ソビエト連邦という、二つの極によって保たれることになる。いわゆる、東西冷戦である。しかし実際には、二極支配の中で「熱い戦争」が戦われていた。1948 年、アジアでは朝鮮半島が南北に分断されて、北緯 38 度線を境にアメリカとソ連の分割統治が行われるようになる。60 年代には、ベトナムを植民地化していたフランスと独立を目指したベトナムとの戦いにアメリカが介入することになる。朝鮮戦争（1950～53）は共産主義から自由主義を守る戦いだった。ところが、インドシナ半島の共産主義化を恐れたアメリカはフランスに代わって介入を始め、反共産主義の南ベトナム政府を支援することになるが、このベトナム戦争（1959～75）も代理戦争のひとつであった。

レーガン大統領、福音派、強いアメリカ

カーター大統領（第 39 代）が大統領選挙で敗れた後、1980 年にロナルド・レーガンが第 40 代合衆国大統領となった。特筆すべきことは、大統領選挙におけるレーガン候補の勝利の背景に、信心深い福音派のキリスト教徒たちの存在があったことである²¹⁾。

21) 福音派というのは、聖書の記述は神の言葉であり間違いがないとする聖書無謬論、キリストによって生まれ変わったとする回心体験（ボーンアゲイン）そして福音を社会に広めたいという熱意をもつこと、などの信仰上の特徴をもつ。福音派は、かならずしもひとつの教派に属しているわけではなく、メソジスト、米国聖公会などの主流派プロテスタントやカソリック教徒にも存在する、諸教派横断的な信仰の

保守的な福音派の人々は、自分たちの信じる伝統的価値の否定、たとえば伝統的な家族観、出産の際の生命の尊重、学校での祈りなどが否定されたり、禁止されたりしたことから、政治に訴えて、断固そうした傾向を阻止するために、「宗教右派」という政治集団を形成して、自分たちと同じ信仰をもつ大統領の選出に努力を払った。彼らは、1976年の大統領選挙でジミー・カーター大統領を支持していた。しかし、カーターは、厳格な政教分離尊重の精神から、歴代大統領とも親交があったビリー・グレアム師とも付き合うことなく、全米宗教放送協会からの強い講演要請は断り、極めつけは、支持層であった福音派信徒たちとの関係も避けるようになっていった。そのため、信仰を同じくする人々との対立の溝はますます深まり、宗教右派は、1980年の大統領選挙を機に、再選を狙うカーターに見切りをつけ、レーガン支持に回った²²⁾。宗教右派に代表される福音派は、レーガン大統領は「神から遣わされた福音派のキリスト教徒」だと信じていた²³⁾。

レーガン大統領は、反共産主義者でもあり、その点、共産主義は神を否定することから反共産主義に立つ福音派とも共通点があった。大統領は伝統的価値、特に家族の価値を復権させたが、対外政策では、ソ連を「悪の帝国」²⁴⁾と呼んで反共ぶりをアピールし、軍事力を強化して、「強いアメリカ」の再建を目指した。共和党は経済政策として小さな政府、減税を主眼に国内政策を策定するため、軍事費の増額は財政赤字を膨らませた。また高金利政策をとったためドル高が進んで海外の商品が流入して貿易赤字を膨らませる結果となり、双子の赤字と呼ばれた。

湾岸戦争とサウジアラビア

ここで、中東情勢に目を転じよう。1979年、亡命中だったアヤトラ・ロホロ・ホメイニ師を中心に、カーター政権終盤に発生したイラン革命により、イランに反米政権が誕生する。イランとイラクとの間に1980年から8年間国境をめぐるイラン・イラク戦争が勃発する。レーガン政権は、イランの反米政権を封じ込めるために、1984年以降4年間、隣国のイラクにさまざまな情報を与え、多額の兵器を供与するなどの支援を行うことで、イラクに、いわば番犬の役割を担わせてきた。一方、同年イラク政治において権力を掌握したサダム・フセインが大統領に就任したが、アメリカの対イラン政策はイラクのフセイン政権を巨大化させる結果を招く²⁵⁾。1990年、石油資源に富む隣国クウェイトの領有をめぐるイラクの関心は

様式である。

22) もちろん、選挙での争点は、深刻な不況から発生した失業問題やアメリカが世界に対して果たす役割の地盤沈下であり、道徳的な問題や宗教でなかったことはいまでもない。また、こうしたキリスト教徒たちの票がレーガンに勝利をもたらす決定的な要因だったともいい切れない。だが、80年代には宗教保守勢力、殊に宗教右派に代表される福音派が政治において無視できない一大勢力になっていたことだけは間違いない。

23) ビラードとリンダーによれば、レーガン大統領の市民宗教も、「偉大なアメリカ」「強いアメリカ」「悪の帝国」など司祭型市民宗教である。

24) 「悪の帝国」の「悪」とは、キリスト教では悪魔 (Satan) のことであり、こうした言葉の選定は信心深いアメリカ人、特にレーガン政権を支える保守的な福音派にもアピールするものだった。当時副大統領だったジョージ・H・W・ブッシュ (第41代大統領) も湾岸戦争で「十字軍」という言葉を使い、ジョージ・W・ブッシュ (第43代大統領) も、「十字軍」「悪の枢軸」など、福音派が敵対心を燃やしやすい言葉を随所にちりばめて演説を行っている。

同国に向けられるが、ついに 1991 年フセイン政権のイラク軍はクウェイトになだれ込み併合を宣言したが、国際社会から批判を受ける。当時のブッシュ政権はクウェイト領内からイラク軍を追い出すために、国際社会と協力して国連決議を経た上で多国籍軍を編成し、湾岸戦争で勝利を収めることになる。

その際、サウジアラビアからイラクをミサイル攻撃するためにアメリカ軍を国内に駐留させたが、こうしたサウジの王族の判断を、当時のオサマ・ビン・ラディンは厳しく批判したため、国籍を剥奪されている。ビン・ラディンは過激なイスラム原理主義者である。サウジアラビアは、イスラム教の三つの聖地（エルサレム、メディナ、メッカ）のうちメディナとメッカという二つの聖地が存在する神聖な土地である。イスラム教徒、殊に敬虔なイスラム教徒にとって、そのような聖なる土地へのキリスト教徒という異教徒の侵入は、十字軍以来の、神聖性を汚す耐え難い屈辱だったに違いない。こうしたビン・ラディン個人にとっての、神聖な土地への冒瀆行為に対する反感が、9.11 テロ事件への遠因となったとする見方もある。これに限らず、なぜアメリカが狙われたかを論じた著作は多いが、アメリカの軍事的・文化的覇権に対する報復措置とする見方も少なくない²⁶⁾。

ソ連の崩壊とアメリカの一極支配

1985 年にソ連共産党書記長のミハイル・ゴルバチョフは、ペレストロイカ（改革）を掲げて、国内体制を刷新し大規模な軍縮を行い、西側との関係を改善しようと努めた。その一環として 1987 年にアメリカとの間で中距離核戦力全廃条約（INF）に調印した。ソ連は東欧諸国に対しても改革を促進し、1989 年にポーランド、ハンガリー、チェコスロバキアでソ連式共産党体制が倒れ、その夏、東ドイツ住民が西ドイツへ大量脱出を図っている。そのあおりを受けて 11 月には、東ドイツがベルリンの壁の開放を宣言し、ベルリンの壁が崩壊した。12 月には、地中海のマルタ島でゴルバチョフとジョージ・H・W・ブッシュが会談し、冷戦の終結を宣言。1991 年、米ソは第一次戦略兵器削減条約（START）に調印して、ここに冷戦が終結した。そのことにより、アメリカによる一極支配の時代が到来する。

5. 2003 年の国際社会とアメリカ

「模範としての使命」

2000 年、ジョージ・W・ブッシュ候補は僅差でアル・ゴア候補を破って大統領に選出され、翌年、第 43 代合衆国大統領に就任した²⁷⁾。翌 2001 年 1 月 20 日、

25) 酒井啓子『イラクとアメリカ』岩波書店、2002 年。

26) たとえばチャールマーズ・ジョンソン『アメリカ帝国への報復』（鈴木主税訳）集英社、2000 年。中山元編訳『発言：米同時多発テロと 23 人の思想家たち』朝日出版社 2002 年。西谷、酒井、白杵『徹底討論、アメリカはなぜ狙われたのか：同時多発テロ事件の底流を探る』岩波ブレット No. 563、岩波書店、2002 年。西谷、鶴飼、宇野『アメリカ・宗教・戦争』セリカ書房、2003 年。

27) 第 41 代大統領ジョージ・H・W・ブッシュの長男。福音派の信仰を持つ人物として知られているが、彼は、テキサス州ミッドランドで、石油ビジネスがうまく行かずアルコール依存症に苦しんでいたが、ブレット牧師と出会い、その後父ブッシュが大統領選挙に出馬する前年には、ピリー・グレアム牧師の警咳に接して少なからず大きな感化を受け、キリストを受け入れ、その後、自ら禁酒を誓って、人生

ブッシュ大統領は、特に第一期政権初期において、選挙戦での勝利が僅差であったこと、さらに選挙結果を司法にまで持ち込まなければ決着がつかなかったことなどから、国民からの信任を得られないまま政権がスタートしたという印象を多くの国民に抱かせた。彼はまた、対外政策よりは国内政策、特に、クリントン政権が提案した「Charitable Choice (慈善の選択)」を踏襲した「思いやりのある保守主義」による福祉政策に力を入れたこと、京都議定書で打ち出された環境問題に対する地球市民の一員としての義務の履行に対しては、関心を示さなかったことなどから、アメリカ国内のみならず、国際社会からも批判を浴びた。ところが、8ヶ月後の9.11テロ事件の発生は、凶らずもそうしたブッシュ政権の追い風となるべきこととなった。

本節では、ブッシュ大統領の対外政策に関する演説を手がかりに、大統領の立場が、「模範による使命」から「介入による使命」へとシフトしていくプロセスを追うことにしよう。

2001年1月20日、ジョージ・W・ブッシュ大統領は、第一期目の就任演説を行った。少々長いけれども、引用しておこう。

……前世紀の大半を通じてアメリカの自由と民主主義に対する信念は、荒れる大海の一つの岩にすぎませんでした。今、それは風に運ばれる種であり、多くの国々に根をおろしています。

われわれの民主主義に対する信念は、アメリカが信じる以上のもので、われわれの人間性に生来備わった希望であり、われわれが所有こそしませんが推し進める理想であり、われわれが託され受け継いで行くものでもあります。そして建国からほぼ225年たった今でさえも、われわれが旅すべき道のりはまだ先が長いのです。

……私は公正とチャンスにあふれた1つの国を作り上げるために働きます。

私は、これが手を伸ばせば届くところにあることを知っています。なぜならわれわれは自分自身より大きな力、自分の形に似せて人を創造した神によって導かれているからです。

アメリカは血縁、生まれ、出生地によって団結してきた国ではありません。われわれは、生い立ちを超えて損得を離れ、国民であることがどういうことを教えてくれる理想によって結びついているのです。全ての子供は、この原則を教わらなければなりません。全ての国民は、この原則を支持しなければなりません。そして全ての移民がこの理想を受け入れることで、われわれの国はますますアメリカらしくなるのであって、決してアメリカらしくなくなることはありません。

今日われわれは、礼儀正しさ、勇気、思いやり、品性をもってこの約束を守り通すことを新しく誓います……²⁸⁾

を改善した経験を持つ。

28) 堀内一史『分裂するアメリカ社会』麗澤大学出版会、2005年、156-8頁。

この引用の第一段落での表現、殊に、「アメリカの自由と民主主義に対する信念」「荒れる大海の1つの岩」「風に運ばれる種」について注目してみよう。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして冷戦という激動の時代を通じ、アメリカは不動の岩のように毅然として、全体主義や共産主義から、自由と民主主義を守ってきた。アメリカが模範を示し守り抜いた自由と民主主義は、今や自然に諸外国に伝播し、元共産圏諸国においてすら根を下ろしている、というのである。ここには、「模範としての使命」に従って自由や民主主義といった価値を擁護するアメリカが描かれている。第三段落では、市民宗教の神への言及が見られる。ブッシュ大統領はそれを「自分自身より大きな力」「自分の形に似せて人を創造した神」として表現した。第四段落では、それを、国民生活の中で捉えなおして「生い立ちを超えて損得を離れ、国民であることがどういふことかを教えてくれる理想」と言い換えている。引用した最後の段落では、「礼儀正しさ、勇気、思いやり、品性」の重要性を訴えて、牧師的な存在であることをアピールして、順当に演説を終えている。

「模範としての使命」から「介入としての使命」へ

しかしながら、こうしたブッシュ大統領の態度が、9.11 テロ事件以降一変する。こうした静的なトーンが、翌年の2002年1月29日に連邦議会上下両院で行われた大統領の一般教書演説以来、一変する。いわゆる「悪の枢軸」演説である。

これらの国々 [イラク、イラン、北朝鮮] と、テロリストの共謀者たちは、世界平和を脅威にさらすために武装した、悪の枢軸であります。大量破壊兵器を手に入れるためにこれらの政権がもたらす危険は、重大かつ増大しつつあります。彼らは、これらの兵器をテロリストたちに提供する恐れがあります。そうなれば彼らは自分たちの憎しみを晴らす手段として使うでしょう。彼らはわれわれの同盟国を攻撃したり、あるいは合衆国を恐喝したりすることもできるのです。いずれにしても、無関心の代償は破局へと導くでしょう……

われわれは落ち着いて慎重な態度をとるつもりであります。しかし、時間はわれわれの味方ではないのです。危険が増しつつあるのに、事件が発生するまで座視するつもりはありません。アメリカ合衆国は、世界でもっとも危険な政権が、世界でもっとも破壊的な武器で、われわれに脅威を与えるのを許すことはないのではありません²⁹⁾。

アフガニスタン戦争に勝利した大統領は、この演説で「アフガニスタンの国民を飢えから救い、残虐非道な圧政から一国を解放した」と述べ、アメリカが自由と解放をアフガニスタンに与えたことを示して、その成果を述べた。その後で、テロ支援国家がテロリストと手を組めば大量破壊兵器によって同盟国やアメリカ自体を攻撃する可能性があること、無関心でいれば大きな痛手を受けかねないこと、そして、アメリカは事件が発生するまで座視するつもりはないことを述べて、先制攻撃

29) 前掲書、172頁。

を仄めかす発言を行っている。

2002年の6月1日、ニューヨーク州ウエスト・ポイントにある陸軍士官学校のミッチースタジアムで行われた卒業式でブッシュ大統領は将来の幹部候補生たちに対して、このように演説をしている。

20世紀のほとんどを通じて、アメリカの防衛は抑止^{ディテレンス}や封じ込め^{コンテインメント}といった冷戦の原理に則っていた。いくつかのケースで、こうした戦略は現在でも適用できる。しかし、新しい脅威が新しい思考を要求していることもまた事実である……
 国土防衛^{ホームランド・ディフェンス}とミサイルによる防衛は、より強力な安全保障の一環であり、アメリカにとってもっとも重要な優先事項である。だが、テロとの戦争は守勢^{ディフェンシヴ}のみでは勝利はない。われわれは敵に立ち向かって戦いを挑み、最悪の脅威が完全な形で姿を現す前に、敵の計画を粉碎せねばならない。(拍手) われわれが突入した世界では、安全保障への唯一の道は、「軍事」行動の道である。そしてわれわれは行動を起こすのである。(拍手)³⁰⁾

この演説は、スピーチライターのマイク・ガーソンによれば、「悪の枢軸」演説の続編だったらしく、かなり力を入れて書いたものらしい。先制攻撃を容認する、いわゆるブッシュ・ドクトリンのほぼ全容がこの演説で表現されている。特に、「われわれは敵に立ち向かって戦いを挑み、最悪の脅威が完全な形で姿を現す前に、敵の計画を粉碎せねばならない」という部分である。演説の最後に、血気盛んな将来の国土防衛の担い手たちに対して、軍事行動を示唆したときには割れんばかりの拍手喝采であったに違いない。

そして、2002年9月17日、ブッシュ・ドクトリン、「アメリカ合衆国安全保障政策」の発表の日を迎える。第五章、「大量破壊兵器を保有する敵国の脅威から、われわれとその同盟国および友好国を守る」の中に「……脅威が増せば増すほど、行動しないことへのリスクはますます高くなる。……敵国の攻撃を未然に防ぐために、必要ならば先制攻撃^{アクト・プリエンプティヴリー}を行う」と記されている³¹⁾。

「介入としての使命」

翌2003年1月28日に行われた議会への一般教書演説で、イラク戦争を神から与えられた使命として積極的に捉えようとするブッシュ大統領の心の構えを読み取ることができる。

アメリカは平和を希求します。そして平和のために戦うのです……この先大きな脅威におびえていたのでは、平和とは呼べません。もし戦争が避けられないならば、われわれは正義の名の下に、正しい方法で戦います。それは、罪のない人々に対する危害を極力回避することであります。われわれは、軍事力を結集し

30) 前掲書、175頁。

31) 前掲書、176-7頁。

て戦い、勝利するのであります。

アメリカと同盟国は……イラクの人々に食糧や医薬品などの支援物資、そして自由をもたらすのであります。

……われわれは、自信をもって前進するのです。なぜなら、この歴史的な使命を果たすことがアメリカに求められているからなのであります。

アメリカ国民は現代のあらゆる試練を乗り越えてきた毅然とした国民であります……われわれの力の行使は征服を伴わず、他者の自由のために自らを犠牲にするのです。

アメリカ国民は自由の民であり、自由はすべての人に与えられた権利であり、また自由はすべての国家の未来に約束されていることを知っているのです。われわれが尊ぶ自由は、アメリカが世界に与える贈り物ではなく、神が人類に授けたもうた賜物なのであります。

アメリカ国民は、自らを信じています。しかし、自分たちだけを信じているのではありません。われわれは、そのすべてを理解していると言うつもりはないけれども、神の摂理を信じることができるのです。そして、生きとし生けるものすべての命、あらゆる歴史を見守る慈愛に満ちた神を信じているのであります³²⁾。

ブッシュの言わんとするところはこうである。アメリカ人は神の摂理を信じる国民である。そして自由はアメリカが与えるのではなく、神が与えるものと信じている。したがって、アメリカは神の代理として諸国に自由をもたらす「歴史的な使命」を負っている。ところで、フセインの圧政に苦しむイラクの人々には自由がない。そして、フセイン政権は大量破壊兵器で同盟諸国や友好国に脅威を与えている。アメリカは平和を望むが、平和を確立し維持するためには戦うことも必要である。もし戦争が回避できなければ戦って、イラクの大量破壊兵器を破棄し、イラクの人々に自由をもたらす。ただし、目標はあくまでフセイン政権の転覆であり非戦闘員への被害を最小限にとどめ、支援物資を提供するなど、手段にも配慮しながら正しく戦う。これが正義の戦いだ、と。

2003年3月20日、国民の7割を超える支持を得て、フセイン政権打倒のためのイラク戦争の火蓋は切って落とされた。アメリカは国連決議を経ることなく、国際協調路線を捨てて単独行動主義に出た。そして5月1日、空母エイブラハム・リンカンの艦上で、ブッシュ大統領はイラク戦争終結宣言を発表し、形の上ではこの戦争は終わった。

6. 21世紀、無極化する国際社会とアメリカ

無極化する国際社会というひとつのシナリオ

ここまで、アメリカ史を建国以前の植民地時代に遡り、そこから現代まで、宗教という視点から見てきた。最後に、2001年以降のアメリカが国際社会の中で担う

32) 前掲書、179-80頁。

役割や影響力について確認しよう。そうするためには、国際社会がどのような状況に置かれているのか、またアメリカはどのような国内問題と対外的な問題をかかえているのか、といったところを確認する必要がある。

20世紀の国際社会はヨーロッパ諸国、アメリカ、ソ連（ロシア）、日本など多極化していたが、二つの世界大戦を経て、米ソの二極支配となった。21世紀における国際社会の秩序は、冷戦時代の二極支配でも、冷戦終焉後の一極支配でもない、それは無極化あるいは無極秩序だ、とリチャード・N・ハース³³⁾は述べる。ハースによれば、無極秩序、無極化とは、国際社会の政治という舞台に登場するアクターが、数十存在して、多種多様なパワーをもったアクターがそのパワーを行使する中で形成される秩序をいい、そうした無極秩序に向かう状況を無極化という。群雄割拠した日本の戦国時代に似た状況である。

およそ20年前にコラムニストのチャールズ・クラウサマーは、大国が相応しくない行為をとり始めると、恐怖や敵対心から、大国と競合するような行動をとり始める国が出現するだろう、という歴史的経験に基づいて、おそらくあと一世代後には、アメリカに匹敵するような大国が出現すると予見した。しかし、そうはならなかった。確かに、反米主義は大きな高まりを見せたが、アメリカに匹敵する大国は出現していない。おそらく、時が立てばアメリカ並みのGDPを手にする国は現れるかもしれない。中国、インド、EU、ロシア、日本など大国あるいは国家群が存在するからである。しかし、中国は少数民族問題のみならず、経済格差など、海岸地域の経済ブームで得た国の富の大半を13億という膨大な人口を支えるために使わざるを得ず、軍事力の整備や海外での活動に大規模な資産を投入する余裕がない。インドも11億という膨大な人口の維持に関連する諸問題、官僚主義による改革の伸び悩みとインフラの不整備が成長の足かせとなっている。EUはGDPではアメリカを凌いでいるものの、国家のような一貫性はなく、政治的合意が困難であることから積極的で果敢な路線はとりにくい。日本は、少子高齢化が進行し、大国として必要な政治文化を欠いたままである。ロシアは人口の低下と社会的連帯の欠如が抑制要因となっている。こうした理由から、近い将来アメリカに対抗する国家は現れそうにない、というのがハースの見解である³⁴⁾。この見解を額面通り受け取れるかどうかは別として、ひとつのシナリオとしては一考に価する。

国際社会におけるアメリカの影響力低下と無極化

このように国際社会が無極化した要因として、9.11テロ事件を挙げることができる。この事件は世界的テロリスト組織であるアルカーイダが関与しているとされている。世界貿易センタービルはアメリカの経済の象徴であり、国防総省（通称ペ

33) 米外交問題評議会会長。ジョージ・H・W・ブッシュ大統領の特別顧問、国家安全保障会議(NSC)の近東・南アジア政策担当シニア・ディレクターを務める。その後、ブルッキングス研究所副所長を経て、米國務省政策企画局長。パウエル國務長官の首席顧問として外交政策に対する広範な助言を行った。2003年から現職。

34) リチャード・N・ハース「アメリカの相対的衰退と無極秩序の到来」『フォーリン・アフェアーズ日本語版』No. 5, 2008年、5頁。

ンタゴン) はアメリカの軍事力の象徴である。経済と軍事の象徴が、アメリカで訓練されたテロリストが操縦桿を握るアメリカの民間航空機によって、破壊された。アメリカの国際影響力というものは、いくつかの理由で衰退しつつある。ここでは、国内要因として、経済格差と移民問題を、対外要因については、対外政策とグローバル化を取り上げてみていこう。

アメリカの影響力低下の国内要因1：所得格差

農務省のデータによると、2005年にアメリカ国内で飢餓状態を経験した人口は3510万人(全人口の12%)、そのうち2270万人が成人(全人口の10.45%)、1240万人が子どもである。「飢餓人口」と定義されるこれらの人々の大きな特徴は、①6割が母子家庭、②子どものいる家庭の飢餓人口数は子どものいない家庭の2倍、③ヒスパニック系かアフリカ系アメリカ人が多い、④収入が貧困ライン以下である。ここで注目したいのは、彼らの39%は何らかの職業に就いているということだ。ワーキング・プアの増大である。たとえば、ニューヨーク市にはプロジェクトと呼ばれる低所得者向け住宅が345箇所、2698棟あり、現在17万5000世帯、42万人が暮らしている。国内最大都市であるニューヨーク市の人口800万人のうち19人に1人はプロジェクト暮らしという計算になる³⁵⁾。

高所得者層と低所得者層の格差がますます広がっている。大きな原因のひとつは、中流階級が高額の医療費のため自己破産し、低所得者となる傾向にあることだといわれる。2005年の統計では、全破産件数208万件のうちの204万件は個人破産であり、その原因の半数以上が高額な医療費だという。国民1人当たりの平均医療費負担額は、2003年度のデータでは年間5635ドルである。この数字は、国民皆保険制度のある他の先進国と比較して約2.5倍高い。2005年に行われたハーバード大学の調査によると、病気になり医療費が払いきれずに自己破産した人のほとんどが中流階級の医療保険加入者だという。原因は、医療保険業界における自由競争と、巨大資本による独占だといわれる。全米294都市のうち、その地域の保険市場の50%以上を、たった一社が独占している都市は166もある。このようにその地域で競争相手がいない保険会社は保険料をいくらでも値上げできる状態である³⁶⁾。

アメリカの影響力低下の国内要因2：移民問題

サミュエル・ハンティントンによれば、現在のアメリカは二つのアイデンティティに揺れているという³⁷⁾。ひとつは、アメリカ合衆国としてのナショナル・アイデンティティ、もうひとつは、アメリカの内部に存在する移民たちの下位文化により形成されるサブ・ナショナル・アイデンティティである。現在もっとも問題視されているのは、増加の一途を辿るヒスパニックの存在である。彼らは、①メキシコと

35) 堤未果『ルボ貧困大国アメリカ』岩波新書、2008年、27-31頁。

36) 前掲書、64-68頁。

37) サミュエル・ハンティントン『分断されるアメリカ』(鈴木主税訳)集英社、2004年。

地続きであること、②流入する移民の量が多数であること、③不法移民も少なくないこと、④二重国籍であること、⑤カリフォルニア州に集中的に定住していること、⑥言語的にも、文化的にも、アメリカ主流文化への同化が遅れるなど、従来の移民とは異なる形態の移民であることにハンティントンが警鐘を鳴らす。1960年代までは白人と黒人の間に溝が存在していたが、今後は白人とヒスパニックとの間に溝が生じ、関係の悪化が懸念されている。たとえば、カリフォルニア州にある町では住人の大半がヒスパニックであるため市長にヒスパニックが選出される。役場から送られてくる文書や通知はすべてスペイン語で書かれているため、英語しか話せない白人は町を出て行くしかない、といった状況がすでに生まれている。こうした諸問題が移民の同化とアメリカ社会の統合を阻んでいるという。

こうした問題にハンティントンは、対策として、アメリカ人のキリスト教への信心深さと愛国心の強さに注目する。彼が問題解決への糸口として提示するものは三つある。ひとつは、国際社会に開かれた国境のある社会であり、二重国籍や民族集団の存続を許し、多様性を重んじる「世界主義」的なアメリカである。もうひとつは、アメリカの国際社会への影響力の優位とアメリカ的価値の普遍性への信念を強調し、政治的保守派が支持する「帝国主義」的アメリカである。しかし、ハンティントンはこの二つを退け、建国以来アメリカを支えてきた「信心深さ」と「愛国心」を基調とする「ナショナリズム」を選択する。

しかし、こうした信心深さと愛国心に支えられたナショナリズムの危うさは、マッキンリー政権やブッシュ政権で戦われた戦争が示すように、「司祭型市民宗教」を信奉する大統領によって、国家の暴挙を見抜き断罪する倫理的・宗教的基準としての「安全装置」を欠いた「国家の自己超越」という形で、「介入としての使命」へと国家を導き兼ねないことである。

アメリカの影響力低下の対外要因1：対外政策

地球市民としてのアメリカの、「解決策は自分」や「世界の警察官」といった態度が、世界中にパワーセンター（権力の中心）を醸成している。二つの事例を挙げておこう。ひとつは、アメリカのエネルギー政策の失敗である。一極支配の秩序を崩壊させた原因のひとつとなった。1970年代のオイルショックを経たあとも、「アメリカの石油消費は20%増え、石油輸入量は2倍以上に増加し、しかも消費に占める輸入石油の比率が倍増した。」³⁸⁾このようなアメリカの対外政策が国内需要を賄うためのものでもあり、二酸化炭素排出基準を無視した環境破壊に加担していることは言うまでもない。さらには、こうした外国石油への依存が原油価格を10年足らずで5倍に引き上げた。原油価格の高騰はOPEC（石油輸出国機構）への膨大な富の移転を引き起こし、資源保有国に交渉のカードを与えることとなった。つまり、アメリカのエネルギー政策の失敗によって、石油や天然ガスを供給する国々が国際社会での強力なプレーヤーとしての権力を掌握する背景を提供したのだ。

38) リチャード・N・ハース「アメリカの相対的衰退と無極秩序の到来」『フォーリン・アフェアーズ日本語版』No. 5, 2008年、6頁。

もうひとつは、対イラン・イラク政策、湾岸戦争、イラク戦争など中東の湾岸地域でのアメリカの振舞いである。第4節で見たように、1979年にイランで発生したイラン革命はアメリカの中東政策に大きなショックを与え、時のレーガン政権は反米化するイランのお目付役としてイラクのサダム政権に情報や物的支援を惜しまなかった。これが後の湾岸戦争につながったことは確認したとおりである。その湾岸戦争において屈辱をなめさせられたウサマ・ビン・ラディンがイラク戦争へと続くアメリカの対外政策の遠因を提供したともいわれる。こうした一連の対外政策には、レーガン大統領、ジョージ・H・W・ブッシュ大統領、ジョージ・W・ブッシュ大統領といった保守的な共和党政権の対外政策が関わっていることは注目に値する。しかもレーガンとG・W・ブッシュの両大統領は、保守的なキリスト教福音派の大きな後ろ盾を得ていたことをここで思い出しておこう。イラク戦争は確かに一国を相手にした戦争であったが、テロとの戦争は「非対称」の戦争であり、国家以外のアクターに権力を与えるきっかけをつくったといえよう。

アメリカの影響力低下の対外要因2：グローバル化

グローバル化はモノ、カネ、情報が国境を超える流れを形成する。eメール、麻薬、温室効果ガス、人、ネットウィルス、病原体、兵器などの、ほぼすべてのものが国境を超えて自由に行き交う流れの中に入参する。こうした流れは、政府の管理体制の外で発生する状況であり、国家をいかんともしがたい状況下に置くこととなり、結果的に、国家の影響力というものを弱体化させる傾向がある。同時に、国境を超えた流れは国家以外のアクターの権力を高める働きをする。たとえば、資源保有国の石油企業、アルカーイダなどのテロリスト集団、多国籍企業などである。多少データは古いだが、90年代のGMの総売上高（約1300億ドル）は、サウジアラビアの国民総生産高（約1100億ドル）を超えていた³⁹⁾。今や、個人や集団が権力を蓄え、国家と対等の立場に身を置き、必要ならば決定的なカードを切ることもできる状況が現実になっている。

むすびにかえて

2009年1月、アメリカはバラク・オバマ政権をスタートさせた。大統領選挙では、民主党陣営では舌戦を繰り広げた女性候補としては初のヒラリー・クリントン候補を振り切ったの大統領候補指名を獲得し、共和党のジョン・マケイン候補を大差で破る圧倒的勝利だった⁴⁰⁾。アメリカでは黒人として初の大統領の誕生であり、ケニア人の父とアメリカ人の母との間に生まれたアフリカ系アメリカ人としての新

39) アンソニー・ギテンズ『社会学』（改定第3版）而立書房、2001年、349頁。

40) オバマ候補は選挙人票349票、一般投票でも64,641,718（53%）を獲得し、一方のマケイン候補は選挙人票163票、一般投票では56,902,300（46%）に終わった。（CNN：<http://edition.cnn.com/POLITICS/>、アクセス日2008年11月7日）また、対マケイン候補投票率でもっとも大差をつけたのは、黒人（99%-1%）、大学院卒（64%-36%）、18歳から29歳までのヤング・アダルト層（61%-39%）、ほとんどまたはまったく教会に行かない人々（61%-39%）であった。2008年大統領選挙でオバマ候補をもっとも多く支持したのは、①黒人、②高学歴者、ヤング・アダルト層、無神論者を含む宗教に無関心な人々であった。（ギャラップ調査：<http://www.gallup.com/poll/111781/Blacks-Postgrads-Young-Adults-Help-Obama>、2008年11月7日）

大統領は、まさにメルティング・ポットを体現した象徴的存在として若い世代を中心に注目を集めてきた。また、G・W・ブッシュ大統領の保守的な共和党政権の後、8年ぶりの民主党大統領であり、1981年発足したレーガン政権以来保守化し、イラク戦争で頂点に達した保守的アメリカの軌道修正を図ることとなる。

オバマ政権は順風満帆の船出というわけにはいかない。アメリカ合衆国内外の諸問題が、山積みとなっているからである。現在アメリカ国民がもっとも懸念しているのは国内経済である。2008年9月に発生したアメリカ発の金融危機は地球市民を震撼させ、世界規模での経済危機を巻き起こした。アメリカ国内では信用不安に追い討ちをかけるように雇用も落ち込んでいて、経済格差はますます拡大することが懸念されている。世界規模での格差問題、いわゆる南北問題にも影を落としかねない状況である。移民問題も深刻な問題である。外交政策の中心課題は、さまざまある中でも何とんでも長引くイラク戦争の後処理問題であろう。イラク駐留軍撤収のタイミングが問題である。また環境問題は地球市民全員に関わる問題だけに一刻の猶予もならない状況にきている。

保守化したアメリカの軌道修正、経済問題、イラク問題、環境問題などさまざまな問題を抱えたアメリカは、無極化する状況の中で、国際社会のあるべき姿への方向づけに貢献していかなければならない。その意味でもオバマ大統領に寄せられる期待はきわめて大きい。

演習問題

<1 節～3 節>

1. アメリカは理念の国ともいわれる。理念とは、たとえば、自由や民主主義であるが、アメリカはそれらを守ろうとしたり、世界に広げようとしてきた。その意味で、日本は理念の国といえるだろうか。話し合ってみよう。
2. アメリカでは大統領が市民宗教の担い手である。日本には歴史的にどのような市民宗教が存在したのだろうか。それは今も存在するだろうか。その担い手は誰なのだろうか。
3. リンカン大統領は南北戦争をどのように理解したのだろうか。演説の内容をよく読んで、話し合ってみよう。

<4 節～5 節>

4. 1893 年と 2003 年のアメリカを対比させ、国際社会の情勢について、共通点や相違点を話し合ってみよう。
5. 1893 年マッキンリー大統領のフィリピン領有に関する演説と、2003 年 1 月 28 日ブッシュ大統領のイラク戦争に関する一般教書演説とを比較してみよう。共通点と相違点について話し合ってみよう。
6. 「模範としての使命」や「介入としての使命」について、例を挙げながら具体的に議論してみよう。
7. 米ソの二極支配による国際社会の秩序とアメリカの一極支配による国際社会の秩序を対比させ、共通点や相違点を話し合ってみよう。

<6 節>

8. 国際社会における無極化についてその原因を確認しておこう。

<1 節～7 節>

9. 地球市民、格差、環境というキーワードを使って、国際社会におけるアメリカの問題点と、今後アメリカが国際社会で果たすべき役割について話し合ってみよう。

引用・参考文献

Bellah, Robert N. 1968. "Civil Religion in America," *Daedalus*, pp. 1-21.

市民宗教の記念すべき最初の文献。邦訳：ロバート・ベラー『社会変革と宗教倫理』（河合秀和訳）未来社、1973 年の第 11 章に収められている。短い論文なので原文で読んでみよう。

Coles, Roberta L. "Manifest Destiny Adapted for 1990's War Discourse: Mission and Destiny Intertwined," *Sociology of Religion*. Washington D.C.: Winter, 2002, vol. 63, no. 4, pp. 403-27.

「明白なる運命」を湾岸戦争に適用して論じた、宗教社会学者による論文。専門的だが極めて示唆に富んでいる。

Fowler, Robert Booth and Allen D. Hertzke. 1995. *Religion and Politics in America: Faith, Culture, and Strategic Choices*. Boulder, CO: Westview Press, Inc.

政治と宗教の関係を縦横に論じた一般向けの啓蒙書。著者たちは現代アメリカでは市民宗教よりも特殊利益団体が大きな力を発揮していることを論じている。

Giddens, Anthony. 1997. *Sociology*. Third edition. Cambridge, UK: Polity Press.

邦訳：アンソニー・ギデンズ『社会学』松尾精文他訳（改定第 3 版）而立書房、2001 年

社会学の泰斗の書籍で、社会学の教科書として広く読まれている。訳語が若干硬めだが一読しておく価値はある。

- Huntington, Samuel P. 2004. *Who Are We? The Challenges to America's National Identity*. New York: Simon and Schuster. 邦訳：サミュエル・ハンティントン『分断されるアメリカ』（鈴木主税訳）集英社、2004年
アメリカ人のアイデンティティを扱った本書は、現代アメリカが抱える移民問題、特にヒスパニック移民をめぐる問題を、分かりやすい言葉で綴った、現代アメリカを知るための必携書。訳語はこなれた文章で読みやすい。
- Jonson, Chalmers. 2000. *Blowback: The Costs and Consequences of American Empire*. New York: Metropolitan Books. 邦訳：チョルマーズ・ジョンソン『アメリカ帝国への報復』（鈴木主税訳）集英社、2000年
9.11同時テロ事件発生前に書かれた文献で、そうした事件を予見した書として注目を浴びた。陰謀史観に立つ書籍ではなく、豊富な資料に裏打ちされたものだけに、読み応えのある著作といえる。
- Mahan, A. T. 1987. *The Influence of Sea Power upon History: 1660-1783*, Dover Edition (original, first published in 1890 by Little, Brown, and Company): New York, Dover publications.
内容は本文で紹介しているので省略する。
- Marsden, George M. 2006. *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*. New York, Oxford University Press.
アメリカ宗教史の専門家が書いた本書は、アメリカの原理主義と福音派を理解するための必読書。原理主義に関する名著。初版は1980年に発行されたが、これは第二版で、1980年から2005年の歴史を追加している。
- Moen, Mathew C. 1989. *The Christian Right and Congress*. Tuscaloosa: University of Alabama Press.
キリスト教右派（宗教右派）がどのようにして共和党と結びついていったかが克明に描かれている。
- Pierard, Richard and Robert Linder. 1988. *Civil Religion and the Presidency*, Grand Rapids, MI: Zondervan. 邦訳：『アメリカの市民宗教と大統領』（堀内一史、犬飼孝夫、日影尚之訳）麗澤大学出版会、2003年
アメリカの市民宗教と大統領の関係を論じた文献で、市民宗教の概念を和文で紹介した数少ない文献のひとつである。
- 酒井啓子『イラクとアメリカ』岩波新書、2002年
レーガン政権のアメリカがどのようにしてサダム・フセインと対峙するようになったかを描いている。
- 猿谷要『検証 アメリカ500年の物語』平凡社、2004年
アメリカ史を植民地時代から現代までを描いたアメリカ史の名著。必読書。
- リチャード・N・ハース「アメリカの衰退と無極秩序の到来」『フォーリン・アフェアーズ日本語版』No. 5, 2008年
専門的な論文だが、アメリカの国際社会における威信と権力が相対化されてきた経緯を述べた、大変示唆に富んでいる。
- 蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』日本評論社、2002年
アメリカ政治と宗教の関係を豊富な資料に基づいて論じている。ファウラーとハーツケの著書に依拠したためか、市民宗教は重視していない。
- 蓮見博昭『宗教に揺れる国際関係』日本評論社、2008年
宗教的なアメリカが国際社会に及ぼす影響を描いた好書。市民宗教についても触れられている。
- 堀内一史『分裂するアメリカ社会』麗澤大学出版会、2005年
文化戦争との関連で保守派とリベラル派に分裂したアメリカ社会を論じている。
- 堤未果『ルボ貧困大国アメリカ』岩波新書、2008年

格差社会アメリカをレポート形式で紹介した啓蒙書。現代アメリカの医療制度、保険制度の実体が克明に描かれている。

*堀内一史 麗澤大学経済学部教授 専攻：宗教社会学、宗教学、アメリカ研究。主な著作：(単著)『分裂するアメリカ社会—その宗教と国民的統合をめぐって』麗澤大学出版会、2005。(分担執筆)「第4章 ソーシャル・キャピタルとボランティア—宗教ボランティアと宗教的ソーシャル・キャピタルをめぐって」、稲葉陽二編著『ソーシャル・キャピタルの潜在力』日本評論社、2008。(翻訳)マイケル・エドワーズ『「市民社会」とは何か—21世紀のより善い世界を求めて』麗澤大学出版会、2008。